

令和元年6月4日現在

機関番号：11101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16840

研究課題名（和文）副詞と前置き表現に注目した配慮表現の歴史的研究

研究課題名（英文）A historical study of politeness in Japanese focusing on adverbs and prefaced expressions

研究代表者

川瀬 卓（KAWASE, Suguru）

弘前大学・人文社会科学部・講師

研究者番号：80634724

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は副詞と前置き表現に注目して、行為指示と感謝・謝罪における配慮表現の歴史の変遷を明らかにした。行為指示における配慮表現については、前置き表現の発達、それと標準語の確立・普及との関連、配慮のストラテジーの変化を記述した。感謝・謝罪における配慮表現については、副詞「どうも」の歴史的变化を明らかにした。さらに、研究の進展とともに見えてきた関連するいくつかの文法現象についても考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

副詞や前置き表現など、述語部分以外の要素に注目して対人的コミュニケーションの歴史を考察する本研究は、従来の配慮表現の歴史的研究で手薄であった部分を解明するものである。また、本研究は配慮表現の歴史的研究の発展に寄与するだけでなく、近年注目されつつある歴史語用論（言語運用の歴史を明らかにすることを目指す方法論）の発展や、日本語文法史において重要な現象の一つである近代語の分析的傾向の解明にもつながるものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to investigate the historical development of politeness in directives, gratitude, and apologies in Japanese, with a focus on adverbs and prefaced expressions. With regard to directives, we describe the development of prefaced expressions, such as “sumimasenga” (excuse me, but) and “yoroshikattara” (if you want), the influence of the establishment of standard Japanese on such expressions, and the resultant change in the norms of politeness. In regards to gratitude and apologies, we recount the development of the adverb “domo.” In addition, we discuss several related grammatical phenomena that were discovered in our research.

研究分野：日本語学

キーワード：歴史語用論 配慮表現 行為指示 感謝・謝罪 副詞 前置き表現 定型化 標準語

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまでの伝統的な国語学、日本語学の研究において、敬語史については相当な記述の厚みがある。しかし、対人的コミュニケーションにおいて、人間関係をうまく調整するための表現は狭い意味での敬語に限られない。たとえば、現代語においては「すみませんが」のような前置き表現や、「～ていただけませんか」のような授受表現の運用なども重要である。このような問題意識から近年「配慮表現」という観点からの研究が盛んになってきている(野田尚史・小林隆・高山善行編『日本語の配慮表現の多様性 歴史的变化と地理的・社会的変異』くろしお出版、2014年など)。歴史的にも、敬語だけに注目するのではなく、配慮表現という観点から歴史の変遷を捉える必要性が学界で認識されつつある。

一方で、これまでの文法史研究において、副詞や前置き表現のような述語以外の要素に注目した研究はさほど多くない。配慮表現の歴史的研究においても、副詞に注目した考察はほとんどなされていない状況であった。前置き表現については、歴史的に前置き表現が発達したという指摘があるものの、研究対象として比較的新しいということもあって、それ以上に踏み込んだ考察はなされていなかった。

本研究は、敬語の歴史的研究から配慮表現の歴史的研究へという新たな研究の方向性をふまえたうえで、これまで研究代表者が行ってきた副詞研究の成果を、配慮表現の歴史的研究へと発展・展開させていくことを目指したものであった。

2. 研究の目的

本研究は、副詞と前置き表現に注目して配慮表現の歴史の変遷を明らかにすることを目指す。配慮表現が問題となる言語行動のうち、行為指示(依頼・勧めなど)と感謝・謝罪を取り上げ、配慮を示す副詞や前置き表現がどのように発達し、定型化するのか、配慮のストラテジーがどう変化するかということについて明らかにする。

述語以外の要素に注目して対人的コミュニケーションの歴史を考察する本研究は、従来の配慮表現の歴史的研究では手薄であった部分を解明するものである。また、本研究は配慮表現の歴史的研究の発展に寄与するだけでなく、近年注目されつつある歴史語用論(言語運用の歴史を明らかにすることを目指す方法論)の発展や、日本語文法史において重要な現象の一つである近代語の分析的傾向の解明にもつながるものである。

3. 研究の方法

基本的な手法は文献資料、方言資料に基づく実態の記述と分析である。調査資料は日本語の歴史的研究でよく用いられてきたものが中心であるが、文体差(話体差)を考慮しつつ、落語SPレコードのように比較的新しく注目されてきている資料も用いる。地域差の問題もあるため、上方・関西の資料と江戸・東京の資料を区別して文献から用例を採取するとともに、方言文法全国地図などの方言資料も活用する。このように、文献資料による調査と方言資料による調査を組み合わせ、文体差(話体差)、方言差に注意を払いながら、歴史的变化を記述する。

4. 研究成果

本研究の主要な成果は以下の通りである。行為指示(依頼・勧め)と感謝・謝罪における配慮表現の歴史の変遷について、一定の成果が得られた〔(1)(2)〕。さらに、本研究課題の研究の進展とともに見えてきた重要な関連現象についても成果が得られた〔(3)(4)(5)〕。

(1) 前置き表現から見た行為指示における配慮の歴史

本研究では、前置き表現の運用に注目して、行為指示における配慮の歴史的变化を考察した。「すみませんが」のような恐縮・謝罪、「よかったら」のような状況確認 いずれの前置き表現も明治期から大正期にかけて定型化していることを指摘し、標準語の確立・普及との関連や、配慮のストラテジーの変化について論じた。本研究は言語運用の歴史を明らかにすることを目指す「歴史語用論」の方法論を示すものでもある。

私たちが日常行うコミュニケーションでは、さまざまな場面で相手への配慮を示す言語表現が求められる。たとえば、行為指示において「すみませんが、この書類に署名をお願いします」「よかったらお召し上がりください」などの定型的前置き表現が配慮を示すために用いられる。近年の配慮表現に関する研究によって、古代語において存在しなかった前置き表現が近代語において発達したということが明らかにされつつあるが、これまでの前置き表現の歴史的研究で扱われてきたのは「すみませんが」のような逆接(注釈)的形式による恐縮・謝罪であった。本研究では恐縮・謝罪に加えて「よかったら」のような条件表現による状況確認の前置き表現も対象とし、前置き表現の運用に注目して、行為指示における配慮の歴史的变化を考察した。

これまでの研究から、恐縮・謝罪は明治期から大正期にかけて定型化していることが知られる。本研究の調査結果から、状況確認についても、明治期から大正期にかけて定型化したことがわかった。いくつかの文学作品を調査した限りにおいては、中世以降、近世にいたるまで、状況確認は「もし哀れと思ひ給はば」(宇治拾遺物語・巻8-4)「酒が御気に入ったらば」(堀川波鼓・上)など、行為の成立条件を満たしているか確認するものばかりであった。具体的な状況は必ずしも問題にせず、聞き手の判断に委ねることを示して押しつけを避ける定型

的前置き表現「よかったら」類（「よい」「よろしい」の条件表現に由来するもの）は、明治期から大正期にかけて成立し、その後定着する。ただし、中古の書簡文例集には、「よかったら」類と同じ前置き表現は見当たらないものの、相手の都合や予定を確認するような前置き表現があることから、文体的な偏りはあるが配慮性の強い「状況確認」の前置き表現自体は中古から存在していたようである。

恐縮・謝罪「状況確認」が定型化した明治大正期は、型にはまった儀礼的表現を好む標準語が確立、普及し始めた時期であり、その他の配慮表現も定型化が進んでいる。明治大正期は配慮表現の歴史における転換点の一つといえる。配慮のストラテジーの面では、「よかったら」類の成立と定着から、近代以降、行為指示において聞き手への押しつけを避けるという配慮の仕方が確立したこと、さらには、比較的聞き手に負担をかけない聞き手利益の事態においても押しつけを避けるという配慮がなされるようになったことが示唆される。

この成果については「5. 主な発表論文等」の〔学会発表〕としてまず公にし、次いで〔雑誌論文〕として公表した。

(2) 感謝・謝罪に見られる配慮表現「どうも」の成立

本研究では、「どうもありがとう」「どうもすみません」など、感謝・謝罪に見られる配慮表現「どうも」の成立について考察した。「どうも」が江戸語・東京語において、对人的意味（聞き手に向けた意味）を獲得し、感謝、謝罪、出会い、別れ、ねぎらいなどの場面において配慮を示す表現になる変化や、標準語としての日本全国への普及について考察し、歴史的観点、地理的観点からいくつかの関連する問題を指摘した。

感謝・謝罪は人のコミュニケーションにおける基本的な言語行動の一つである。現代日本語には様々な感謝・謝罪に見られる配慮表現があるが、その中でよく用いられるものの一つに「どうも」がある。感謝・謝罪に見られる配慮表現の歴史については、定型的表現である「かたじけない」「ありがとう」の歴史や「すみません」の歴史が比較的早くに論じられており、近年は定型的表現以外の歴史についても論じられるようになってきている。しかし、「どうも」の配慮表現への変化については、十分には明らかにされていなかった。本研究では地域差にも注意を払いつつ、どのように「どうも」が对人的意味を獲得して感謝・謝罪に見られる配慮表現へと変化し、普及していったのか考察した。

「どうも」は近世期では感謝・謝罪における配慮表現として確立しているとは言えないが、近世後期江戸語において、相手から恩恵を受けた際に恐縮を示す对人的意味を帯びたものがわずかながら見られる。明治期に入ると、配慮表現の「どうも」がある程度見られるようになってくる。明治開化期から明治20年代前半までは、配慮を表す「どうも」の基本は恐縮の気持ちにあり、「どうも」を使いつつ、文を最後まで言い切らない言いさしで恐縮を示すものが目立つ。言いさしで用いられる「どうも」は謝罪場面において用いられ、談話の中で他の謝罪表現とともに用いられる。こうした謝罪場面は同時に出会いの場面であることも多く、「どうも」は出会いの場面における挨拶としても用いられる。また、恐縮を示す「どうも」は感謝場面において用いられることもあった。このようにして、恐縮を示す「どうも」に、謝罪表現との結びつき、単独での感動詞的使用、感謝表現との結びつきが生じていく。

「どうも」は19世紀末から20世紀初頭（明治後期・大正期）には感謝表現や謝罪表現との結びつきを確立させ、感謝、謝罪、出会い、別れ、ねぎらいなどの場面において配慮を示す表現として用いられるようになった。明治大正期の話し言葉資料である落語SPレコードからは、当時の大阪の日常語としては配慮表現の「どうも」が普及していなかったのに対して、東京語においては配慮表現の「どうも」がよく使われるという地域差がうかがえる。また、国定国語科教科書では、第4期以降、すなわち昭和期以降に感謝における配慮表現として「どうも」が採用されている。このことは東京語で成立、発達した配慮表現「どうも」が標準語として日本全国に広まることに大きく影響したと考えられる。

以上のような「どうも」の歴史的变化は、次のような問題と関連する。古代語とは異なり、近代語では感謝表現や謝罪表現と結びつきの強い副詞が発達していること、日本語の配慮の根底に「恐縮」があること、買物における挨拶行動の方言分布、感謝表現と結びつく副詞や感動詞における語彙的資源のタイプの地域差などである。

この成果については「5. 主な発表論文等」の〔学会発表〕としてまず公にした。〔雑誌論文〕として公表予定である（掲載確定済み）。

(3) 副詞「どうやら」の史的変遷

現代語の「どうやら」は「ようだ」「みたいだ」「らしい」などと共起して「推定」を表す。

「推定」は歴史的变化の結果生じた用法だが、これまで「どうやら」の史的変遷を考察したものはほとんどなかった。本研究は不定語と助詞によって構成される副詞の一つである「どうやら」について、その周辺も考慮して史的変遷を明らかにした。

成立初期である近世前期上方語において「感覚的描写」を表していた「どうやら」は、近世後期江戸語において「推定」も表すようになり、さらに、近代以降「推定」へ偏りを見せ、現代語においては「感覚的描写」は表さなくなっている。このような「どうやら」の歴史的变化の背景には、意味変化の一般的傾向、類義語の影響による「感覚的描写」の衰退、「どうやら」の類義語から「どうぞ」の類義語となることで結果として「どうやら」を脅かさなくなるとい

う「どうか」の史の変遷がある。

「どうやら」そのものは配慮表現に直接関係するものではないが、行為指示における配慮を表す副詞「どうぞ」や「どうか」の歴史の変遷と関わる。また、これらの副詞が、係助詞に由来する不定の助詞「やら」「ぞ」「か」の歴史的推移とも関連することを示し、今後の研究の広がりを見通しを得ることもできた。

この成果については「5. 主な発表論文等」の〔雑誌論文〕として公表した。

(4) 不定の「やら」「ぞ」「か」の東西差と歴史的推移

「やら」「ぞ」「か」には「何やら」「どこぞ」「誰か」のように不定語と結びついて任意の要素の一つ指す語を形成する「不定」の用法がある。これまでも、それらの成立と勢力交替について大まかに描かれてはいるものの、近世後期上方語における使用状況や、明治大正期の関西、東京それぞれの使用状況などについては不明なところが多く、不定の「やら」「ぞ」「か」の地域差と歴史的推移の実態は必ずしも明らかでなかった。本研究では、近世後期以降における不定の「やら」「ぞ」「か」の地域差（東西差）と歴史的推移について調査するとともに、不定の助詞のありようと不定語の歴史的变化との関係や、言語の社会的位置づけが言語変化に及ぼす影響についても検討した。

近世後期以降、「やら」「ぞ」「か」の使用割合は歴史的に推移していくが、各時代の東西差に注目すると、どの時代でも相対的に上方・大阪語で「ぞ」が多く、江戸・東京語で「か」が多い。助詞の歴史的推移で注目されるのは、先に「か」が発達した江戸・東京語のあとを追うかのように、上方・大阪語で「か」の使用割合が高くなっていく点である。このような上方・大阪語における「か」の勢力拡大は、中央語としての東京語ないし標準語が、地域語としての大阪語に影響を及ぼしたことによるものと考えられる。また、不定語と結びついて新たな語を形成するという点で、不定の助詞のありようは不定語の歴史的变化にも影響することが注目される。

不定の「やら」「ぞ」「か」の地域差と歴史的推移は、係り結び衰退後の助詞の一展開として文法史上、興味深い現象といえる。また、配慮表現である副詞「どうぞ」「どうか」の成立など、不定語の歴史を明らかにするうえでも重要である。さらに言語の社会的位置づけと言語間の影響関係なども視野に入れて複層的な日本語の歴史を描くことにもつながりうる問題である。

この成果については「5. 主な発表論文等」の〔学会発表〕としてまず公にした。〔雑誌論文〕として公表予定である（掲載確定済み）。

(5) 仮定、可能性想定を表す副詞の史的展開

現代語において仮定を表す副詞と可能性想定を表す副詞は違った語形である。仮定は「もし」が表し、可能性想定は「もしかすると」類（「もしかすると」「もしかしたら」「もしかして」）が表す。他に「もしかすると」類に似た副詞としては「ひょっとすると」類（「ひょっとすると」「ひょっとしたら」「ひょっとして」）もある。しかし、時代をさかのぼってみると、かつては同じ副詞が仮定も可能性想定も表していた。本研究では、副詞「ひょっと」の意味変化と「ひょっとすると」類の成立を考察し、そこから、もともと同一の副詞が表していた仮定と可能性想定の意味が、異なる副詞によって表し分けられるようになる過程について明らかにしたものである。

「ひょっと」は擬声語・擬態語の意味から派生して、1700年頃には仮定や可能性想定を表すようになる。近世後期では「ひょっと」単独ではなく、「ひょっと」に「する」の条件形やテ形が接続した「ひょっとすると」類のような複合的な形式が現れる。これは「ひょっとして」を除いて、可能性想定専用の形式である。これが明治期以降「もし(や/か)」に影響を与えて「もしかすると」類が成立する。それによって、仮定と可能性想定を表し分けるシステムが確立した。本研究は副詞を視点として古代語と近代語の違いを考察し、副詞の呼応する意味が分化する場面があることを指摘したもので、近代語の分析的傾向を追究する研究とも位置づけられる。

この成果については「5. 主な発表論文等」の〔学会発表〕としてまず公にし、さらに発展させてとして公にした。加筆修正のうえ、雑誌論文として公表することを目指しているとこである。

そのほか、漢語の副詞化についてまとめられた著作に対して、研究の可能性や方法論の妥当性という観点から論評を行った。〔雑誌論文〕

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

川瀬卓、感謝・謝罪に見られる配慮表現「どうも」の成立、『近代語研究』21、査読無、2019年刊行予定（掲載確定）

川瀬卓、不定の「やら」「ぞ」「か」の東西差と歴史的推移、金澤裕之・矢島正浩編『SP盤落語レコードが拓く近代日本語研究』笠間書院、査読無、2019年刊行予定（掲載確定）

川瀬卓、前置き表現から見た行為指示における配慮の歴史、高田博行・小野寺典子・青木博史編『歴史語用論の方法』ひつじ書房、査読無、pp.242-262、2018年

川瀬卓、副詞「どうやら」の史の変遷、『語文研究』第124号、査読無、pp.56-44、2017

年

https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/2202929/p044.pdf

川瀬卓、〔書評〕鳴海伸一著『日本語における漢語の変容の研究 副詞化を中心として』、『日本語の研究』第12巻3号、査読無、pp.141-148、2016年

DOI : https://doi.org/10.20666/nihongonokenkyu.12.3_141

〔学会発表〕(計5件)

川瀬卓、感謝・謝罪を表す「どうも」の成立、第357回日本近代語研究会、2018年

川瀬卓、仮定、可能性想定を表す副詞の史的展開 近代語の分析的傾向の一例、近代語学会研究発表会、2017年

川瀬卓、副詞「ひょっと」の史的展開、第269回筑紫日本語研究会、2017年

川瀬卓、不定語と助詞「ぞ」「か」「やら」の結びつきの東西差 落語 SP レコードを中心に、第268回筑紫日本語研究会、2016年

川瀬卓、前置き表現から見た行為指示表現の歴史 「よかったら」類を中心に (ワークショップ「行為指示表現の歴史語用論」趣旨説明、司会も担当) 日本語学会2016年度秋季大会、2016年

〔図書〕(計0件)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。